



羽生市長 河田 晃明氏

市長のメッセージ

羽生市は、「誰もが幸せを感じる、住み続けたいまち 羽生」を目指し、未来を見据えたまちづくりに取り組んでいます。

令和2年9月、羽生駅の南西の岩瀬地区に大型商業施設、住宅街区、医療機関、学校等が一体となった「愛藍タウン」が誕生しました。

また、羽生水郷公園南側の農業団地「羽生チャレンジファーム」では、民間企業による農業参入が進んでいます。これまでにいちごの観光農園等が開園し、水稻から高収益作物への転換モデル地区としても注目されています。

これからも羽生市の新たな魅力を発信してまいります。

はじめに

羽生市は、埼玉県の北東部、都心から60km圏に位置し、東と南は加須市、西は行田市、北は利根川を隔てて群馬県に接している。市域は東西10.3km、南北6.7km、面積58.64km²、人口は5.4万人で、昭和29年に県内16番目の市として誕生し、令和元年に市制施行65周年を迎えた。

東武伊勢崎線が市内を南北に、秩父鉄道が東西に走り、市内には両線の乗り換え駅となる羽生駅をはじめ、計4駅が設置されている。道路は、東北自動車道が市の東側を南北に通り、羽生ICが利用できるほか、国道122号と国道125号が市内で交差するなど、交通の利便性が高い。

羽生市はすぐ北を流れる利根川の恵みとともに歩んできた。県内でも屈指の米どころとして有名であるほか、「衣料のまち」としても知られる。江戸時代後期、利根川流域の土壤に合った作物として、北埼玉一帯で藍と綿の栽培が始まり、武州正藍染や足袋の生産が行われ、「衣料のまち」の礎が築かれた。明治40年代に300軒以上あった羽生の藍染めの染物屋は、現在は数軒になったが、正藍染の剣道着は、今も多くの武州正藍染で作られている。

国道122号が利根川を渡る手前に立地する道の駅はにゅうでは、羽生の特産品の購入ができるほか、利根川と日光連山を見渡すことができる風景がドライバーにも人気で、特に夕日に照らされて真っ赤に染まる風景は一見の価値がある。

★「愛藍タウン」がまちびらき

羽生駅の南西に位置する岩瀬地区では、良好な住環境を保持した新市街地の形成を目指して、平成8年から土地区画整理事業が進められてきた。

特にこの地区の国道122号沿いのエリアについては、地元自治会や学校、病院関係者や進出企業などが集まり、まちづくりの方向性について検討を重ねた。

その結果、商業施設、住宅街区、医療施設、教育施設が半径1kmの範囲に集約されるまちづくりを目指すことになった。

そして、大型商業施設のオープンに合わせ、令和2年9月に河田市長が「愛藍タウン」のまちびらきを宣言した。なお、まちの愛称の「愛藍タウン」は、市内児童・生徒・学生への公募により決定されたものである。



オンライン配信イベント「みんなで笑おう24時間ムジナもんch」

羽生市概要

人口(2021年6月30日現在)	54,116人
世帯数(同上)	23,677世帯
平均年齢(同上)	48.2歳
面積	58.64km ²
製造業事業所数(工業統計)	151所
製造品出荷額等(同上)	2,739.1億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	531店
商品販売額(同上)	1,049.2億円
公共下水道普及率	36.5%
舗装率	63.8%

資料:「令和2年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- 東武伊勢崎線 羽生駅、南羽生駅
- 秩父鉄道 羽生駅、西羽生駅、新郷駅
- 東北自動車道 羽生ICから市役所まで約4km

みんなで笑おう24時間ムジナもんch

「世界キャラクターさみっとin羽生」は「まちおこし」に積極的に取り組んでいるご当地キャラクターが参加し、「人と人」、「地域と地域」をつなげ、全国に「笑顔」と「元気」を届け、地域の魅力を発信しあうとともに、羽生市を広くPRし、地域の活性化を図っていくイベントである。毎年、国内外から着ぐるみのご当地キャラクターが300体以上集合し、10万人以上が来場する。平成22年に「第1回ゆるキャラ®さみっとin羽生」として開催され、第5回からは、今の名称に変更して実施されている。

昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、11月開催予定のさみっとは延期となったが、主催者の強い思いもあり、オンライン配信イベント「みんなで笑おう24時間ムジナもんch」を開催することになった。「ムジナもん」は、国内では羽生市内で唯一自生する食虫植物、ムジナモに因んで誕生した、羽生市のキャラクターのひとつである。イベントは、市内の特設スタジオと全国のご当地キャラクターをオンラインで結び、YouTube上で24時間に亘って各地域の魅力がPRされた。

エンディングでは、視聴者とともに作り上げた、さみとの新テーマソングが披露された。視聴者はFAXやメール、ツイート等を活用して参加、応援を行い、エンディングでは1,200人以上が視聴、配信後のアーカイブも8,900回の視聴となるなど、期待以上の成果があり、羽生市を含む全国各地域の活性化に貢献した。

羽生のムジナモ発見100周年

ムジナモはモウセンゴケ科の食虫植物で、全体の形がアナグマやタヌキの尾に似ているため、その別名「ムジナ」から名づけられた。国内では明治23年に、羽生市では大正10(1921)年に発見された。かつては全国各地の沼や水路などで見ることができたが、自然環境の変化を受け、今では、長年の保護活動を行ってきた羽生水郷公園内の宝蔵寺沼が国内唯一の自生地となっている。昭和41年には、宝蔵寺沼の自生地は国の天然記念物に指定された。

今年はムジナモが羽生市で発見されて100周年となり、記念講演会、記念見学会、記念パネル展などが開催される予定だ。

今も、市民が中心となってムジナモの保護活動が続けられており、今後も、羽生水郷公園内で、希少なムジナモが育っていくことを願いたい。（太田富雄）



花を咲かせたムジナモ